

浄土 第64巻第3号(毎月1回1日発行)平成10年3月1日発行 昭和10年5月20日第3種郵便物認可

浄土

monthly
JŌDO

1998 March

3



法然上人鑽仰会・発行



テレコムしよう。



コミュニケーションの未来へ
日本テレコム

お申し込み、お問い合わせはお客様センターへどうぞ。

☎ 0088-82 (無料) または 0120-0088-82 (無料) (受付時間) 9:00~23:00 (年中無休) [インターネットホームページ] <http://www.japan-telecom.co.jp/service/>

寺院紀行

撮影 ● タカオカ邦彦

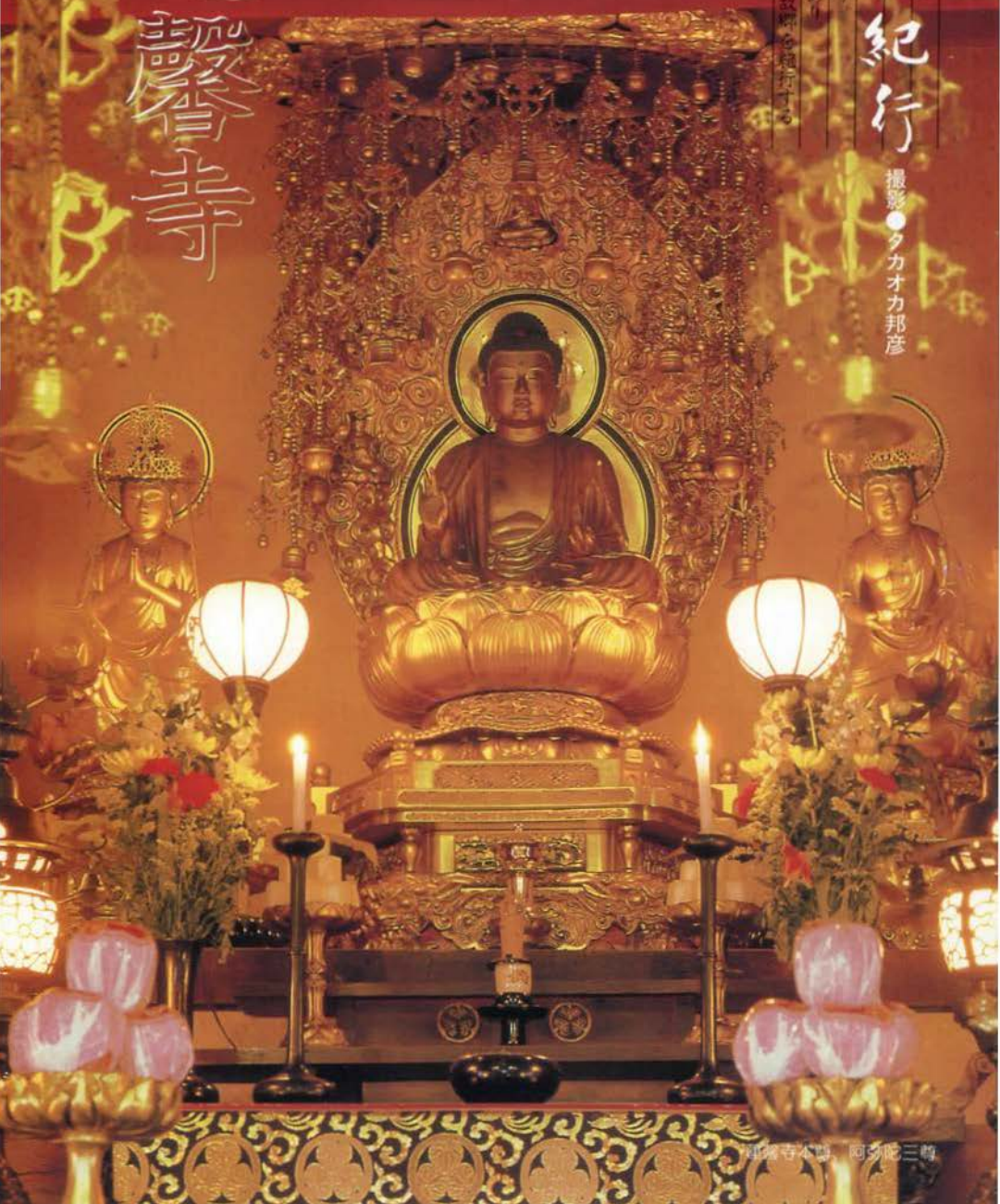
寺に歴史あり

人々に信仰あり

日本の心の故郷を模索する

川越

蓮馨寺



吞龍上人像。
多くの人々が上人に祈願する

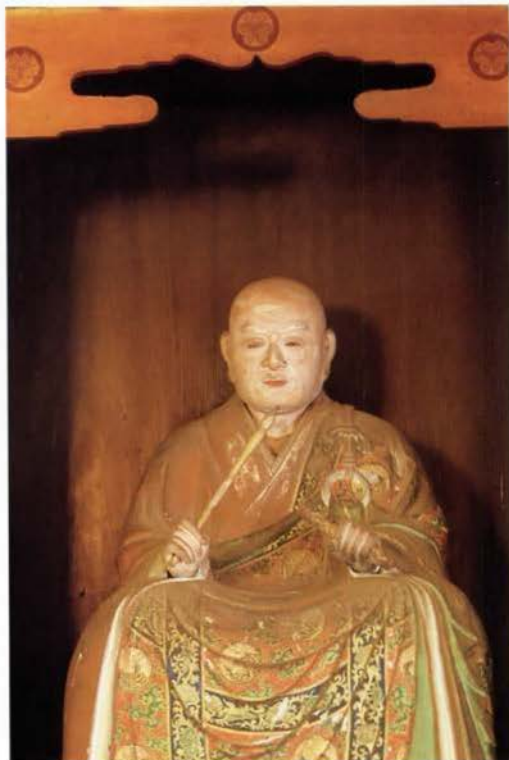


吞龍上人を祀る吞龍堂

川越
蓮馨寺



感譽上人による南無阿彌陀仏の名号



蓮馨寺開山、感譽存貞上人像



寺宝の豊太閤御朱印禁制札



菓子屋横町



蓮馨寺第四十八世久米原恒久住職



小江戸川越名物、時の鐘

浄土

1998/3月号 目次

カラーグラビア寺院紀行「蓮馨寺」	写真＝タカオカ邦彦	3
巻頭特別インタビュー・延年転寿	成田有恒	8
国際寺院とタイ仏教	村田洋一	22
表紙は語る	川井 聡	31
寺院紀行 川越「蓮馨寺」	真山 剛	32
コラム若和尚のちょっといい話		41
御法語に聴く		42
ホットアングル	利根川 裕	50
コラムなんか変だな		55
仏教相談	大室了皓	56
うまい野菜と料理の話	我田 大	60
J フォーラム		65
事務局便り		
編集後記		70

表紙題字＝浄土門主 中村康隆猥下
 表紙撮影＝川井 聡
 アートディレクション＝近藤十四郎
 協力＝迦陵頻伽舎



延年転寿

新春特別インタビュー

『選撰本願念仏集』奉戴八百年の年を迎えて

浄土宗宗務総長

成田有恒師に聞く②

【聞き手】

本誌編集顧問

大室了皓

■ 今年、法然上人が『選択集』をご撰述されて八百年ということで、各地でいろいろな記念行事が行われます。

一宗とされましても、いろいろなお考えがおりと思います。そのことにつきまして、特に宗務総長のお考えをお聞きしたいのです。

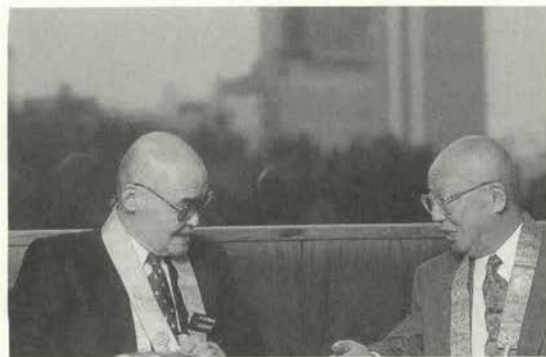
成田 繰り返し言われていることですけれども、この間、佛教大学の先生がおっしゃっていました。浄土宗の長い歴史のなかでも『選択集』の奉戴ということをやるのは初めてだ、というんです。浄土宗の歴史を調べたらね。

■ 奉戴の記念事業というようなことはしたことがない、ということですか。

成田 そう。ま、それはともかく、ご承知のように、私は法然上人の『選択集』というものは、法然上人が浄土教団というものをはっきり意識された証だと思えます。すでに立教開宗はしていましたが、この『選択集』によって、浄土宗の教えを体系的にまとめ、宣言したのではないでしょうか。

で、建久九（一一九八）年という年に撰述されたということは、お弟子さんも非常に増えてきて、ひとつの宗教団体としてのテーズといえます。基本的な理念というものを確立するために著された

撮影 ● 小堀祐二



成田有恒師（左）にインタビューする大室了貳本誌編集顧問（右）

と思うのです。『選択集』の後ろの方にもいろいろ秘密文書的なところが出ていますね。

■ ああ、ありますね。

成田 教団が置かれた環境に、そういうところもあったのではない。だから、お弟子たちの中にも、この『選択集』を読ませてもらうことが、エリート的な立場に立つというようなこともあった。だから親鸞聖人がこれを読まれて、大変感激するということがありましたよね。そういう性格もあったと思いますね。教団の基礎固め、というような意味ですが。

■ では、現代における意味として『選択集』をどう受けとめるか、ということになるとどうでしょう。

成田 そこでですね。八百年前のその当時の『選択集』の受け止め方そのままでいいのかどうか。これが我々に与えられた課題になっていると思います。

なぜかという、八百年前のことですからね。もちろん、内容が古くなっているとかいう意味ではありません。受け止め方、拡げ方をどうするのか、ということですね。与えられた課題を、どう展開していくか、そのへんにいろいろと、みなさんのお考えがあらうかと思っています。この奉戴記念ということを通じて、そういうことが拡が

っていつてくれたら有り難いな、と思っているわけです。

■ 文字通りに、といいますか、文字面だけで考えるな、と。まあ、たとえばお経の中にも、女性の往生をあえてうたっているところがありますね。

成田 『無量寿経』の第三十五願ですね。

■ ま、当時はそれが社会常識なのですが、たとえば女人禁制の靈山があつたり、また、まあ卑近な例でいえば、女性は土俵に上がるなというようなことは、いまでも残っていたりしますね。

けれども、総長がいまおっしゃったように、書かれたものを文字通りにそこだけ取り上げて女性蔑視などと言っていたのでは、お経の正しい意義は伝わらない、というようなことをよく考えるんです。これと同じように、『選択集』を考えるときに、もし現代であつたなら、法然上人はどうお考えになるだろうか。どうおっしゃるだろうか、と考えたいのです。

成田 たとえば法然上人は七十五歳のときに土佐に流されます。その途中の室の津で遊女が船で漕ぎつきます。そして苦悩を訴え、救いを求める。上人はおっしゃる。遊女を続けることは好ましくない、もし辞められるのだったら辞めなさい。けれども、もし辞められないのだったらしかたがない、と言っています。お念仏をとなえるこ

とにおいて、それはちつとも差し支えないことなすよ、と。

そして最後におっしゃった言葉がまたいいですね。「卑下することなかれ」と。そういつた境遇にある女性に対してさえ、はつきりと男女は対等の立場にあると、強く訴えています。

ほかにもたくさんあります。たとえば『無量寿経』の釈の中に、比叡山は女人禁制の結界であるというけれど、雉や鹿はどうなんだ、と。雉や鹿の牝は入れるではないか、あれは女じゃないか、と法然上人は男女平等をはつきりおっしゃっています。

これは、まあ『無量寿経』に限らず、古い経典は古代インドの文化というか、思想のようなものが基調になっているもので、そこから三十五願の問題が出てくるのであって、そこを法然上人自身も八百年昔といえども、わりと自由に解釈なさったのではないでしようか。

■ つまり、時機に相応して考えている。

成田 そうです。

■ さっきの室の津の遊女の話には、私はいつも感激するのです。当時としては、彼女たちをしていることは蔑視されていたのだろうと思いますが、そこを、卑下してはいけない、とおっしゃった素晴らしさが特に印象に残ります。

成田 こんなことを考えるのは不遜かもしれませんが、私はそのとき法然上人の立場を考えてしまうんです。若いころには考えもしなかったことですが、そのとき法然上人は七十五歳。いま七十五歳の自分がですよ、流罪になって、つまり七十五年生きてきた人生のすべてを無くしてしまうようなことに耐えられるか、と。

■ それは辛いことですね。

成田 そうでしょ。天下の大罪人として流されるのですから。僧侶の名前までとられ、俗名をつけられて、ですよ。

■ そうでしたね。

成田 そのお立場ですよ、遊女に向かって話されたわけです。相手が遊女でなくなつて、とにかく自分自身が罪人となつていくわけです。考えてみたら大変なことですよ。そのお立場で、しかも、卑下することなかれ、ですから。自分がこの年になってみて、なんか痛いほどわかるような気がするんです。法然上人のお気持ちです。

■ 記録に残っているんですからね、それが。つまり、周囲の間は聞いているわけですね。卑下することなかれ、を。罪人のくせにとんでもないことを言うじゃないか、と、なる。

成田 船に乗っているんですね。罪人ばかり乗っている船。遊女の船がそこに漕ぎつけてくる。船端で話した。そういう状況、環境を



考えると、とんでもなく大変なおしやつた。

でも、私自身も若いころは、そんな風には思わなかった。単なる一シーンとしてのみ把らえていた。

我々は法然上人の一生をよく知っています。よく判っています。

ひとつのそういう狭苦しい歴史観の中で理解したつもりになっている。しかし、自分の一生の中でこれをとらえ直したら、これは大変なことだったんだなあ、と、しみじみ思いますね。

■ よほど深い、人びとへの愛情といったものがないとできない。成田 できない。そういう強さを維持することができません。

■ 遺された法然上人の絵を拝見いたしますと、優しそうなお顔お姿をしていらつしやいますが、実は心の中にはものすごく強いものがある、と。

成田 鎮西上人におしやつた言葉で、なぜ法然という名前をつけたのか、というところがあります。たいていの人は出家したときにいろいろ因縁があつて、この世を捨てたところに出家があつた。ところが自分はなんの因縁もなく、ごく自然に、法爾自然に出家したのです。だから法然と、黒谷の師僧が、おそらく寂空上人でしようが、つけてくれた、というのです。ところが、なんの因縁もなく、というところが我々にとっては意外な言葉なのです。なぜなら、九

歳のときにお父さんが殺されて、お母さんと別れて十三歳で比叡山に入るという、大変に深い因縁がある。その因縁をあえて無視して、法爾自然。まあ、そこでは法爾自然とは言っていない、法爾法然と書いてありますが、ここところが一般の世法のレベルでは捉えきれない。もつと高い次元にある人間の生きざまとしての法然上人像が見えてくるのではないだろうか。

■ その法然上人、六十六歳のときの、いわば立教開宗宣言が『選択集』ということですから、これを真摯な態度で受け止めていかなければならないわけですが。しかし、『選択集』は、いま我々僧侶が読んでも難しい書物です。論理的ではあるのですが、なかなかすらすらと読むわけにはいきません。

成田 そうですね。あの中に「念仏の大利」という言葉があります。これは極樂往生はもちろんなのですが、延年転寿という功德があると書かれています。念仏の功德は歳を延ばし、寿命を転ずるということです。長生きするということです。今流の言葉でいえば、長生きして健康であるということ。

私は、これが二十一世紀に向けての、お念仏の一番大事なことのひとつになると思うのです。それは死んだら阿弥陀さまのお迎えをいただいで、極樂往生すること、それはわかっています。

しかし、それまでは一年でも寿命を延ばすこと。お念仏の功德によつて、たとえば、八十歳のところを五%延ばして八十四歳まで生きなさいよ、というのが『選択集』の基本的な精神ではないかと思うのです。

■ それが『生けらば念仏の功つもり……』

成田 そうです。あの言葉もつないで解釈しようと思うと間違えると思います。念仏の功がつもつたから、死なば浄土へまいりなむ、じゃないんです。あれは別なんです。

■ 二つに切れているんですね。念仏の功がつもっているから生きているときは悪いがありません、と。

成田 そうです。二つのことなんです。そこが自力と他力の違いなんです。生きているときは安穩に暮らす。そして、亡くなつたときは弥陀の誓願によつてお浄土へいく。こういうことなんです。

■ お浄土という話が出ましたが、往生浄土、浄土観ということについて、どうお考えでしょうか。

成田 法然上人のお言葉にもあります。「のちのことを期するべからず、期するところおこすべからず」と。これはつまり、極楽浄土のことを考えてはいけないう。死後の世界というものは、あれは阿弥陀さまの世界なのであって、人間の世界のことではないんだ。



そういうことをおっしゃっています。この間、宗議会でもお答えしました。法然上人は六万遍のお念仏をなせ七万遍に増やしたか、一万遍足りないとお浄土へ行けないから増やしたのか。そうではありませぬ。一遍だっていいのです。お浄土というものは、阿弥陀さまの世界というものは、客観的にいって実在しています。実在しているけれども我々には見えないのです。見えないのです。近世の科学による実証主義では見ることはできません。ここに学問的な——知識と言ってもいいと思いますが——証明ができないから「ない」という考え方も生まれてきますが、そうではありません。あるんです。お念仏を相続する、重ねることによって感じられてくるんです。これは私の実感なんです。だからこそたくさんお念仏を相続しなさい、ということになります。その力によってあちらに行くとか行かないの問題ではなくて、お浄土というものを実際に感じられるかどうかの問題なのです。

私自身、あり難いことに、四、五年前からですが、ふとした動機から毎日三万遍から四万遍のお念仏を欠かしたことがありません。

■ 一日三万、四万遍とは並の努力ではできないことです。

成田 それでも法然上人の半分しかやっていません。なぜ回数を決めたかといいますと、十年間で計算してみたんです。一日三万五千



となえますと、一カ月で百万、一年で千二百万、十年続けますと一億二千万になります。ちょうど日本人一人ひとりに代わってお念仏できるな、と思つたのです。ところがやっているうちに気づいたのですが、十年生きられる保証はないんだ、と痛感しましてね。だから一日の分をもつと増やして、少しずつ貯金することにしたんです。念仏貯金です。今日現在で二百十日ばかり貯金ができていますよ（笑）。

■ その勢いですと、八年くらいで達成してしまいますね。

成田 そうです。延年転寿とはこれかな、と思います。実際はこのあと八年しか生きられなくても、お念仏は決めた十年分となえていくわけだから、つまり二年長生きしたのと同じになる。これが、むしろ延年転寿かな、と。

お念仏の有り難さというものが、ようやく、この年になって分かってきました。ある程度ですよ。そんな大袈裟なものじゃなくて。法然上人がおっしゃるように、お浄土というものが、見えてきたという変化かもしれませんが、実感として感じられるようになってきましたよ。

■ 私なども、たとえば三心四修などの理屈ではなくて、いついつまでもお念仏をとなえていくことができればいいと願っています。

お念仏をとなえることによって、だんだん何か心が純化していく。

人間的にも人格的にもまろやかになっていく。家内などは、お父さん少し丸くなったなどと申しますが、人間が向上していくような気がいたします。ご利益などといっているわけではないのでしようが、今の人にはわかりやすい言葉でもあります。物を見る目が変わってくる、自信がつく、慈悲の心が自然に湧いてくる、といったようなことを感じます。この頃夜中に目が覚めると、ふっとご本尊さんのお顔が浮かぶのです。お浄土は見えるわけではありませんが、身近に感じること、多少ともわかってくるようになりました。

ところで、檀信徒にたいしては、こういったことをどう伝えるのが最善でしょうか。

成田 私のお寺では、毎月お経とお説教の会を開いています。これはもう三十五年間続いています。それとは別に、最近、第三土曜日に別時念仏をやるうじやないか、と、これが最初は五、六人の参加で始めたんですが、だんだん人が増えて、十人になり、十五人になってきています。なるほどな、と思いましたよ。

知的に話を理解することとは別に、いや、それも大事なんですけども、それ以上なんです。二時間なら二時間、お念仏だけするという有り難さがあるんですね。

■ 都会のお坊さんに聞きますと、昔はみんな近くに住んでいて、一声かければすぐに集まった。しかし、いまはドーナツ現象で、遠くバラバラに離れてしまったから、なかなか集まらない。だからうちはやらない、とこう言うんです。でも、私は三人でも五人でもいいんじゃないかと思うのです。私の寺でも、月に一度法話会をしていまして、いま二百五十何回になりましたが、昔は三人でした。やめてしまおうかとも思ったのですが、せつかく始めたんだから、というわけで続けていると、人も増え、それも一時間も二時間もかけて通ってくれるんです。

成田 本当に遠くからやってくる人がいますね。これは命懸けのことですから、自分の問題ですから、自分で求めてくるんです。これは私も感じました。いま、うちのお説教会は四、五十人ですよ。

■ そういう檀信徒に対して、この奉戴八百年、『選択集』の内容を分かりやすく教えるにはどうしたらよいでしょうか。

成田 もちろん、正しく伝えることも大切だと思います。しかし、それとは別に、さつきから言っていることだと思えます。つまり延年転寿。長生きと健康のみ教えが説かれている、と説明します。五月に施餓鬼、十月に十夜をしていますか、そのとき簡単なお齋をお出します。五目ご飯とか筍ご飯とか。それを私は「長生き飯」と

言っています。ばらばらに食べないで、みんな一緒に食作法をして。そのとき、来年まではお互い分からないよ、と言うんです。一年は長いから。でも今度、秋には一緒にこのご飯をいただきますように、って。これはわかりやすいんです。そこまではお互い生きようってことなんです。

人間にとって、一生はどこで終わるのか、これが最重要課題なんです。死と向き合うことは避けられないんです。逃げてはいけません。向かっていかなければ。逃げるから長い手が伸びてきて襟首をつかまれるんです。向かっていけば、死の方がたじろぐかもしれないでしょ。念仏の気迫でもって向かっていく、これくらいじやななきゃだめです。

■ なるほど。『選択集』を一所懸命読んで、悩んで何も伝えられないよりは、はるかに実践的で有効に思えます。本日は有り難うございました。



国際寺院と タイ仏教

写真・文

村田洋一

(本誌・編集部)

東南アジアの中でも上座部仏教をいまに伝える国は数える程である。仏教を広めた釈尊が亡くなり百年が経ち、弟子たちの間で釈尊の教えの解釈に違いが生まれ、仏教は上座部(南伝仏教)と大衆部(北伝仏教)とに分かれた。

北伝仏教は中国、朝鮮半島を経て日本にも伝わるなど、今もなお広い地域に残っている。一方、南伝仏教はスリランカ(現セイロン)やタイ、ミャンマーなどに残っている。そうした南伝仏教の中で、悟りだけを目的として世界中からの僧侶が集まるタイの国際寺院とそれを受け入れるタイ仏教の背景をたずねてみた。



タイには多くの寺院の遺跡が残っている



国際寺院の食堂



近代的な建物の理想ホール

悟りのための国際寺院

国際寺院とは聞き馴れない言葉だが、宗教、とりわけ仏教に興味のある人には、好奇心をわかせる言葉に違いない。どういう寺院なのか、何を目的としているのか、興味が尽きないだろう。

一言でいうと、国際寺院は悟りを目的とした僧侶のための寺院だ。寺院に入る資格や条件はまったくない。悟りという共通目的を追い求める世界中の人びとのために門戸を開いている寺院である。

悟りとは仏教の究極の目的だ。仏教を開いた釈尊、お釈迦さまをブツダというが、ブツダとは悟った人という意味である。つまり、仏教徒にとって悟りはひとつの完成形態なのである。

さて、この国際寺院はタイ東部の県、ウボン・ラーチャターニーにある。ウボン・ラーチャターニーはラオスとカンボジアに接するタイで最も東の県で、ヴェトナム戦争時代は戦争特需で活気に溢れていた。しか

し今では交通が不便なこともあり、観光客もほとんど訪れない所である。そのウボン・ラーチャターニーの南西12kmに国際寺院はある。正式名称をワット・パ・ナナーチャートという。

前にも述べたが、国際寺院の最大の特徴は悟りを求める者なら誰でも入れることだ。そして外国人僧侶のための英語による仏教学講義があることも特徴のひとつだ。

この国際寺院を訪れたのは昨年の12月だったが、その名のごとく、多くの外国人が僧侶としてこの寺で修行をしていた。悟りを求める修行僧は19人。タイ人が3人、アメリカ、イギリス、スイス人が2人ずつ、そしてあとは一人ずつだが、フランス、ロシア、ドイツ、カナダ、ニュージーランド、イスラエル、フィリピンなど、世界中からこの寺に集まってきている。まさに国際寺院の名にふさわしいといえるだろう。

国際寺院は幹線道路から少し入った森の中にある。森といっても山や丘ではなく平地なので、日本の感覚でいうと林のほうが適切かもしれない。お釈迦さまの

修行の場は森で、悟りを開いたのも菩提樹の木の下だった。やはり修行や悟りのためには、自然の中のほうがよいことだろう。

修行はメディテーション

国際寺院の朝は早い。朝の3時には鐘が鳴る。起きるとまずおよそ2時間の座禅。そして準備をし、5時半には托鉢に出る。近くの村を5人1グループでまわり、7時に寺に戻る。托鉢で集まった物で食事をする。8時から9時半までは掃除。掃除のあとは午後3時まで休憩。3時から5時まで座禅。5時半から全員一緒にお茶を飲み、あとは自由時間だ。

これが通常の日課で、週に2回、集中的にメディテーションをする日がある。これはタイの寺では一般的で、通常の日課に加え、午後歩きながらのメディテーションや座禅が加わる。また週に1回は徹夜のメディテーションがあり、満月や新月などの日を選び、真夜中に1時間のお茶を飲む休息をとるだけで、朝まで



ホール正面に祀られている本尊



国際寺院副住職のウィパシー師

メデイテーションや座禪を組む。この時は近所の村から主に女性が集まり、一緒にメデイテーションに加わる。タイでは女性は僧侶にはなれないので、こうした時に手伝いをする形で参加するしかないからだ。

お釈迦さまの当時は苦行や難行が悟りへの道と信じられていた。

だが、お釈迦さまが苦行難行では悟りが開けないと悟ったように、国際寺院の修行も精神を集中するメデイテーションや座禪がその中心となっている。

そのメデイテーションや座禪は仏像が飾られている大きなホールで行われたり、森の中の現代的な作りの建物で、そして歩くメデイテーションは森の中で行われる。人里から離れ、自然に囲まれた環境はまさに悟りのためにはもってこいで、これ以上はない条件がそろっている。

口外しない悟りの境地

現在、国際寺院の住職と副住職とともにイギリス人

で、住職がアボット師、副住職がウィパシー師だ。訪れた時は住職が不在で副住職のウィパシー師に話を聞いた。ウィパシー師はイギリスで出家したが、出家前からメディテーションをしていたという。そして出家の理由は大学で心理学を学んでいるうちに仏教に興味を持ったことだという。

「ニルバーナ（涅槃・ねはん）に何か力強いものを感じる。そしてそれにデジャヴー（既視現象）が結び付いた。おそらくわたし自身、遠い過去に僧侶としての人生を送っていた、と思うのです」

イギリスにはインドを長い間植民地としていただけに、いろいろな文献がある。ダンマパダというパーリ語の基本経典は1000年も前から英訳されている。それだけにイギリスでは読書で仏教に興味を持つ者が多い。彼もその一人で、そうした中で、タイを訪れタイの僧侶と会って衝撃を受けたという。余談だが、彼は日本にも来ていて日本人の僧侶にも会っているが、残念ながら衝撃は感じなかった。

そしてタイからイギリスに戻り仏教教団に参加、こ

の寺の創始者ともいえるアジャンスメードー師に会いに再びタイに来て、今日に至っているという。彼がここに来た目的はもちろん「悟る」ことだ。

さて、国際寺院において、悟った僧侶は一体何人いるのか、悟った後は何をするのか、そんな疑問が浮かんできた。それを聞いてみると、人びとの中でその悟りを役立てて行くという答えだった。ただし、「わたしは悟った」と口にする事は、僧が守る戒律の中で戒められているので、悟ったかどうかは回りが判断することになる。ここが難しい。つまり、国際寺院から卒業（う）していった僧侶の中に悟ったものがいたかどうかわからないのである。また、現在いる19人の僧侶がもし悟ったとしても、「悟ったこと」と判断するのはやはり回りの僧侶であり、また民衆なのである。

タンブンとタイ仏教

さて、こうした悟りのためのタイ仏教を支えているのが「国民」である。タイの全人口の95%は仏教徒



なごやか雰囲気のある僧侶。
出家したばかりのようだ



市場で托鉢する少年僧たち

で、誕生、成人、結婚、新築、店開き、葬儀とあらゆる行事が仏教によって彩られる。季節感の乏しいタイでは仏教の行事が四季を彩っているといってもいいほど、国民に根付いている。

タイは王制の国で、憲法には、国王は仏教徒でありかつ宗教の擁護者である、と銘記されている。その上出家者である僧侶はサンガ法という国家法のもとにおかれている。サンガとは僧侶の集まりの意だが、この法のもとタイの僧侶は全国統一の組織に必ず入っていることになる。

国があり、県があり、市があると、国王や内閣、県知事、市長がいるように、僧侶にも国王や内閣、県知事、市長にあたる位がタイにはある。

さらに、サンガには教理試験というシステムがあり、その試験が僧侶の階級に深い関係がある。聖域である寺院が同時に学校や相談所、福祉施設、病院、宿泊所、裁判所など多くの役割を果たすように、僧侶もいくつもの役割を果たす。教師などはその最たるものだ。

そうしたこともあり、この教理試験に受ければ一般

社会でも通用し、学校卒業の資格や私立学校の教師の資格まで得られるシステムとなっている。それだけに村の僧侶はともかく、都市の僧侶の関心は教理試験に向けられるという。

こうした既成仏教に疑問を持ち、反体制の行動や権利の主張をすると、強制的に還俗といつて僧侶から普通の人にもどされてしまうのである。憲法には宗教の自由を謳っているが、こういう事実を見ると一瞬、混乱してしまう。しかし、こうしたサンガ法の制定前からある長い歴史や伝統があるだけに、タイの僧侶の世界の秩序に乱れは起きない。

またよく知られているが、タイでは男子のほとんどが一度は出家をする。期間に決まりはなく、3日であろうが、3年であろうが構わない。というのも、普通の出家者にとって大切なことは、出家することと徳を積み、現世や来世での幸福を得られるということだからだ。本当に仏教に傾倒し僧侶になろうとするものを除けば、自分の現世、あるいは来世において幸せを約束する行為とし出家しているのだ。

さて、自分の幸せのために徳を積み、これをタイではタンブンと呼んでいる。

タイの仏教を知るには、このタンブンという行為を理解しなくてはならない。そしてこれを理解することは、同時にタイ人の人生観を知ることにもなる。ここにそのタンブンの考え方を的確にあらわした文がある。「タイ人はより高い社会的地位、より豊かな経済的地位に生まれ変わることを極楽と考え、今より低い地位や貧乏、あるいは動物に生まれ変わることを地獄と考える。彼らが『タンブン―功德を積む』のは高い地位や豊富な資財をもって生まれるためであり、再び苦難にならないようにというためである」

こうした考え方で、人びとは僧侶に布施をする。タイの僧侶は自分の食事を托鉢で賄う。寺の外では衣で両肩を隠すが、タバールと呼ばれる托鉢用のボール状の器も衣の下に隠す。そうして布施をもらう時にタバールを出す。何をもらっても僧侶はお礼を言わない。功德を積ませてあげているのであり、お礼を言うのは功德を積ませてもらった布施した側という考え方から



タイの人々の信仰はとても深い



である。

さて、タンブンにもいろいろあるが、徳を積むには、僧としての出家、息子を出家させること、お寺への寄進、聖跡の巡礼、僧への食べ物、供養、小動物や小鳥を逃がしてあげることなどがある。

“仏教の中”に生まれる国

タイの仏教の歴史を繙くと、仏教を統治の根幹として取り入れたのがスコータイ王朝で、日本の鎌倉時代にあたる。記録では、タイ文字を創案したといわれるラムカムヘーン王がスリランカから上座部仏教の長老を招いたとされ、王自身も仏教を深く信仰されていたという。

この時以来、仏教はタイという国の統治組織の役割と、文化の伝承者という役割をおわされたのである。そしてアユタヤ王朝など、時代／＼で花開き、二十世紀に入ってからタイの近代化における国民教育の役割を仏教がなうことになる。

つまりこの国では仏教が社会を、文化を、教育を先導してきたといっても過言ではない。それは、首相や軍部も決してさからうことのできない絶対的権力を持つ国王が仏教徒であることが憲法で制定されていることから明白である。

こうしてみると、仏教がまるで国の政策として導入、利用された道具のように思えてくる。それは確かにある意味では否定できない。が、仏教の教えの持つ道徳観、倫理観、理智性、そして純粹性が民衆に受け入れられ続けてきたことを忘れてはいけない。

『因果応報—善行によって善果を得、悪行によって悪果を得る』や『輪廻転生』という仏教の考え方が、民衆に僧侶や寺院とともに一緒に暮らす習慣を定着させ、タイ社会の、人々の生活の根幹を作っていることは誰も否定できない。

仏教はタイに内在していた宗教、という表現が適切に違いない。タイでは今なお多くの人々が悟りを求め出家する。そして出家した僧侶を篤く敬う民衆。まさに仏教が社会を作り、タイ国を彩っている。

こうしたお国柄だからこそ、国際寺院という発想も生まれるのだ。世界中から悟りを求める人々を無条件に受け入れる。肌の色や目の色が違っても、この国では僧衣をまとってれば、僧侶として、仏教徒として扱われる。この仏教国の素晴らしさを最も感じているのが、国際寺院で日夜悟りのために修行する僧侶たちに違いない。



表紙は語る

車窓から

写真と文

川井 聡

月

乗降客の途絶えた
駅には哀愁だけが残る
あるいは不意に
客車の窓の木枠から
懐かしい旅
の記憶がよみがえる
鉄路の果てに
彩いていくひとり
ひとりの人生

函館本線 小樽駅

北海道小樽市

三月は別れとか出会いとか期待とか不安とか
そうしたいろんなものが、こちゃこちゃにな
ってやつてくる時期です。これが四月にな
ると、同じような状況でありながら、目の前
には現実が訪れてしまってるわけで、けっ
こ開き直れたりするものなんです。

今なら三月の何ともやるせないような気分も
好き、といえるのですが、十代の頃はまるで
人生全体が失恋したようなせつない気分にな
ったものです。

そんな気分はほくだけじゃないらしく、はや
りうたやフォークソングなんかにも、この季
節を歌ったものがたくさんあります。

この列車は札幌行きの普通列車。まるで「な
ごり雪」の唄のようなカップルがホームで別
れを惜しんでいました。

かわい さとし 大阪生まれ。小学校の頃の「SLブーム」にはまりカメラを手にする。
現在は、週・月刊誌などで人物から商品まで幅広く活動中。

寺院紀行

川越

蓮馨寺



文／真山剛
撮影／夕力才力邦彦

京都にたいして、その街並みや佇まいが似ている街を小京都と呼ぶことがある。高知の中村や金沢の萩など、全国に小京都は少なくない。しかし、小江戸（こえど）となると全国にたったひとつ、埼玉の川越になる。

川越は東京から北西におよそ五十キロメートル。江戸城の北辺の守りの拠点として、そしてさまざまな物資の供給地として江戸時代に栄えた街だ。こうした歴史ある街だけに数多くの神社仏閣や、江戸を今に伝える史跡や建物が残っている。

日光、久能山と並び三大東照宮に数えられる仙波東照宮。関東三大師のひとつ川越大師喜多院。六世紀半ばに創建された氷川神社、童唄「通りやんせ」の歌詞にうたわれた三芳野神社。そして江戸の面影を残す蔵造りの街並みや、川越名物の時の鐘。名物のサツマイモの各種お菓子里、ノスタルジックな雰囲気を感じ出す菓子屋横町、などなど。

東京から近く、日帰りの観光客が多いとはいえ、年間三百五十万人が訪れる立派な観光地である。

今月はこの川越の街の中心地に伽藍を構える蓮馨寺（れんけいじ）を訪れた。

観光地として名所をいくつか紹介したが、江戸の香りを今に残し

関東三大師の一つ喜多院



ているのは、神社仏閣や昔ながらの建築物ばかりではない。川越は江戸文化の四季を彩るさまざまな行事や祭りを伝えている。小江戸、川越に残る伝統文化や祭りを並べてみよう。

初大師だるま市（川越大師、喜多院）

犬竹の一升講（市内犬竹地区―小豆粥の飽食神事）

筒がゆの神事（市内石田・藤宮神社）

南大塚の餅つき踊り（市内南大塚、西福寺・菅原神社）

老袋（おいぶくろ）の弓取式（市内下老袋・氷川神社）

芳地戸（ほうじと）のふせぎ（市内笠幡・尾崎神社―悪魔払い）

小江戸川越春まつり（旧川越城下町と伊佐沼畔）

中福の神楽（市内中福・稲荷社）

石原のささら獅子舞（市内石原町・観音寺）

南田島の足踊り（市内南田島・氷川神社）

川越祭りばやし（市内中台・八雲神社／市内今福・菅原神社）

まんぐり（市内上寺山・八咫（やた）神社―悪魔払い）

初山（川越市内富士見街・浅間神社―新婚花嫁と出産後の初詣）

老袋の万作（市内下老袋―五穀豊穡の芸能）

川越百万灯夏まつり（市内商店街通り）

川越氷川の杜薪能（川越総鎮守氷川神社境内）



一昨年建てられた講堂

ほろ祭り（市内古谷本郷・古尾谷・八幡神社）

川越まつり山車十台（本川越駅前中央通より蔵造り街並み）

西の市（市内連雀町・熊野神社）

川越不動蚤（のみ）の市（市内久保田町・成田山不動尊境内）

月例縁日子育て吞龍（どんりゅう）デー（市内連雀町・蓮馨寺）

こうしてみると、本当に色々な伝統ある行事や祭りが川越の一年を彩っている。

川越の中央通りに位置する蓮馨寺の境内も、毎月八日の子育て吞龍（どんりゅう）デーには地元の人たちで大にぎわいする。普段から開放している境内だが、この縁日には辻講釈、雑貨市、古道具、手打そば、駄菓子など、地元商店街の出店などが並ぶ。節分にはお稚児さんの行列が蓮馨寺から歩き始め、ぐるりと町内を回る。街のメインストリートのほぼ真ん中に面しているだけに何をして人も人が集まりやすい。

取材の当日は平成八年に作られた「蓮馨寺講堂」で葬儀が行われていた。たまたまの不幸で葬儀に使われていたが、蓮馨寺講堂は多目的コミュニティホールで、生きた仏教と市民の接点にしたいという、住職の志の如く普段はコンサートや地元の集会所として使われている。これも立地条件を十分活かしている。

さて蓮馨寺は正式名称を狐峰山宝池院蓮馨寺という。天文十八年（一五六六）現在の川越蓮雀町の寺から西に約六キロメートル離れた知行所平方村（現在の埼玉県上尾市平方）に建立された。現在その地にはやはり浄土宗の馬蹄寺が建っている。

開基は、上杉軍から川越城を攻め落とした北條氏康が新たな川越城主とした家老の大道寺駿河守政繁の母、法名蓮馨大姉。開山はその蓮馨大姉の甥にあたる感譽存貞上人。この感譽存貞上人は学徳一世に秀でた逸材で、大本山増上寺の第十世にもなったほか、寺を開くこと九つ、門下の英才は十指に余り、学僧が常に三百人、そして浄土宗の教えを伝える伝法に、感譽流と名を残すほどの名僧だ。

この感譽存貞上人が天正二年（一五七四）に遷化（亡くなること）してから二十三年後の慶長二年（一五九七）に蓮馨寺は関東十八檀林のひとつとなるのだが、これは感譽存貞上人の名声と学識によるところが大きいといわれている。

檀林と呼ばれる寺については、本誌昨年の六月号で取材した群馬県館林の普導寺の時の記事で述べたが、浄土宗を篤く信仰していた徳川家が関東で十八のお寺を選び、そこを僧侶の養成機関と認めたお寺のことである。

この名だたる名刹の住職が蓮馨寺第四十八世の久米原恒久住職だ。



松平家康の判物。寺宝の一つ

久米原住職は昭和二十四年にこの蓮馨寺に生まれた。二人の姉がいる三人目の長男。話しを聞くとこの寺の後を継ぐ事を明確に意識した高校時代から、父である先代をよく見ていたようである。

サンスクリットを勉強していた先代はいわゆる俗にいう堅物だったという。先代の祖父はもっと厳格だったというが、先代も僧侶の世界では一目置かれる学匠だった。その先代を見て、現住職はあえて仏教系ではない大学の法学部に進んだ。

酒もやらず、いつも机に向かっている真面目な父を見ると、その真面目さのあまり、檀家さんも気楽には話せず本音も出しにくい、という印象を強く持ったという。そのため、学生時代は自分が寺の跡取りだということは学友にはひとことも言わなかったという。あくまで自分自身の人間性に対して付き合っただけだったからというのがその理由だ。そして、やりたいことをどんどんやった。

だが、父の「旧檀林を預かる身として、恥ずかしくないだけの学問は身につけろよ」という言葉と、自らも人の生き方を教えるのが仏教の本来の目的だ、という課題を持っていたこともあり、大学卒業後にさらに太正大学大学院に学ぶ。

その後、さまざまな経験を積んだが、学生時代からの、社会への働きかけ、というモットーは変わらなかった。

今も残る川越城本丸御殿



先代は三年前に八十歳で遷化した。先代が元氣な頃からいろいろ寺の有り方については、意見を述べていたという。

いまからおよそ十年前に、当時副住職だった住職の提案でいろいろなことを始めている。

まず、もと檀林ということもあつての学寮復活。歯医者に貸していた家を学生寮に改装、三部屋ある住み込みの寮で、常時三人の学生が住んでいる。学生は大正大学に通う僧侶志望の学生だ。

そして除夜の鐘の一般公開。蓮馨寺の鐘は水舎とともに、明治二十六年の川越の大火から逃れたものだが、その鐘を大晦日に撞きたい人に撞かせている。毎年百人近く増え、いまでは八百人近くの人々が協力して百八ツ撞く。そして祈願所の吞龍堂には夜中の三時頃まで祈願の太鼓が響いているという。

また墓地の区画整理、ベツト靈堂の新設なども積極的に住職に勧めた。これは街ぐるみのアイデアだが、小江戸川越七福神の第五番福祿寿神の礼所になったのも十年位前からだ。

そして先に紹介した一昨年完成した蓮馨寺講堂の建設。こうしてみると非常に積極的にお寺を開放している。

その住職は、寺を、信仰をこう語る。

「生きている人間にとって何が必要か、何を求めているかが重要



かつて蓮馨寺があつた上尾市平方の馬蹄寺

です。浄土宗は念仏第一の教えですが、念仏をいかに現代、とくに行きける社会に活かすかが大切で、私はこれを明かるく伝えたいと思っています。

わたしは念仏を媒介として、自分たちが阿弥陀さまという大きな生命、宇宙全体の導きとつながっているのです、と人々に話します。大きな世界に抱かれる安心感が、心の拠り所になればと願っています。みなさんが寺に期待していますから、それにできるだけ応えなくては……」

境内の奥の竹林が見渡せる部屋で、住職は時間を気にせず話をしてくれた。とてもわかりやすい話だった。「寺は一般の人々の生活を応援する場であり、命の洗濯と元気づけの場」とは、わかりきった事のようにいながら、説得力がある。こういうお寺があれば、わ

吉野法衣店

各大本山御用達浄土宗袈裟法衣専門



〒160 東京都新宿区南元町17
TEL 03-3355-2168
振替 東京21176372

なしたちには何ともありがたい。

さて、こうした住職の考え方の背後には、蓮馨寺名物の呑龍上人（どんりゅうさま）の存在がある。

呑龍上人は、蓮馨寺開山の感譽上人の弟子の観智国師の高弟で、やはり檀林の群馬の太田大光院の開山だが、困窮している農民の子どもに生涯にわたり慈悲の手を差し伸べられた方で、子育て呑龍と呼ばれ多くの人々に今なお崇められている上人だ。この呑龍上人の像が明治の神仏分離によって、蓮馨寺に祀られることになった。

その像を祀るお堂は入り口の正面にあり、祈願所として多くの参拝者が手を合わせる。そしてその中にはいろいろ相談や悩みを打ち明ける人が少なくない。そうした悩みを住職は副住職時代から丹念に聞いているという。この経験が住職のバックボーンとなっているのだ。人々が仏教に何を求めているのかを実感し、一般レベルで寺を見ることが大切さを痛感し続けているのだ。

かつては檀林という僧侶養成の大学だった蓮馨寺は、その面影を残しつつも、地元と強く結び付き、その根をさらに深くおろそうとしている。何かあったら相談にこようか、小江戸川越の街を歩きながらそう思った。

（ルポライター）

火災を逃れた檀林当時の貴重な資料



数日前、不覚にも「あの」A
香港型インフルエンザ流行の最
後部に乗せていただいた小生。
ワープロのキーをまさか布団の
中でたたくことになるとは。咳
は止まらない、鼻水も止まらな
い、頭痛はするし、体温計の水
銀は、いつ、何度計っても三九
度付近を行ったり来たり。

恨めしく窓の外に目をやれば
「そんなの知らないよ」とばか
りに、日に日にその輝きを増し
ている陽光、そして鳥たちの楽
しそうな会話。寒い寒いとばか
り思っていたのに、すっかり春
がやってきていたみたいです。

そんな春はまた、卒業や入学
の季節でもありますね。定めら
れた年限の学業を無事に修め、
巣立ち、さらに上の学校へ、ま

若和尚の

ち　よ　っ　と　い　い　は　な　し　其三十四

たは社会へと進んでいく。卒業
式には、各人それぞれが描いて
きたドラマのひとコマひとコマ
が、かけがえのない涙や笑いで
彩られることでしょう。

思うに……「卒」や「退」の字
が付くとしても「終わり」
のイメージは拭い切れません。
確かに、卒業すればそれまでの
学生生活は終了ということには
なりましょう。

ただ、決して断絶してしま
うのではないはずです。「もうこ
れでおしまい」のではなく、
「卒」や「退」は、すぐまた始
まる新しい世界、生活への入口
そのものであるはずです。そう
積極的に、前向きに考えること
が、自身の大きな飛躍へと結び
つく契機ともなるでしょう。

それぞれの季節、それぞれの
春。さまざまな思い出をかみし
め、また新しい日々への期待と
不安をいただくすべての方々へ、
心からエールを送りたいと思
います。

ところで「卒業」といえば、
平成七年三月号からおつき合い
いただいていたこのコーナ
ーも、今回が最終回。長い間有
難うございました。「いいはな
し」とは名ばかりだったと、今
さらながら反省しております。
これもまた、「終わり」ではな
く、一つの区切り、新しいステ
ージの「はじまり」と思つて、
精進したいと思います。

どうか今後も「浄土」により
一層のご支援を、そして末永く
ご愛読下さいますよう。（正）

御法語に聴く

この世のいのりに、仏にも神にも申さん事は、そもくるしみ候まじ。後世の往生、念仏のほかにあらぬ行をするこそ、念仏をさまたぐれば、あしき事にて候え。この世のためにする事は、往生のためには候わねば、仏神のいのり、さらにくるしかるまじく候なり。

【津戸の三郎へつかはす御返事（九月十八日付）】

この世をよりよく過ごせるように仏さまや神さまに祈ることは、差し支えありません。けれども、後生の往生を目指して、念仏以外の行を修することは、念仏を妨げますから、よろしいことではありません。この世での御利益のために祈ることは往生のためではありませんので、仏さまや神さまに祈りを捧げても格別不都合なことではありません。

春を待つ

春がそこまでやってきました。

筆者も含め、雪国に住む人にとって春は待ち遠しいものです。

冷寒地での冬の生活は、雪やその寒さゆえの心配事一つ一つに、否応なく、しかも慎重に対処していかなければなりません。生活すること自体、その積み重ねのようなものですから、いつのまにか「しんどい」暮らしぶりを余儀なくされてしまうのです。

たとえば水道があります。真冬が続いたり、朝の気温がおよそマイナス5度を下回りますと水道管が凍結して水が出なくなります。顔が洗えない、食事が作れない、水洗トイレなども意外と困ります。生活に支障があるばかりか、最悪の場合、水道管が破裂することもあるのです。ですから水道管の凍結には、冬のあいだ中、つねに気を配らなければなりません。

天気予報は聞き漏らさず、翌朝の予想最低気温が低ければ、凍結しないように一晩中水道の水を流し続ける。基本的にはこれで凍結の防止となります。ただし、ジャージャーと大量の水を流し続けるわけにもいきません。凍らない程度に推量を調節するのがポイントで、経験と勘、そして手先の器用さがものをいうのです。

凍結するような水道栓はたいがいトイレなどの手洗いで、家の中でも薄ら寒い人気のないところにあるものです。夜になってから、そんなところで手先と膝を働かせるのは多少なりとも苦になりましょう。

願えるものなら、凍結の心配などせぬまま寢床につきたい。

ものぐさな私はさておき、一人暮らしのお年寄りやご病気の方なら、切実にそう思うことでありましょう。

そんな「いのり」が通じてか、活躍しているのが水道管に巻き付ける電熱線です。水道管ごと電気で温めてしまおうというのです。専用の節電器も市販されていますから大したものですよ。これでもうひと冬、薄ら寒い手洗いの蛇口で水量の調節などしなくて済みます。ものぐさなうえ不器用な私は、当然、電熱線がたよりです。

さて、水道についてはこれで万全と、快適な日々を送るはずでしたが、先日の朝、電熱線をコンセントに差し込んだままであったはずなのに、水道管が凍結してしまったのです。しかも、よりによって給湯器につながっている配管です。厳寒の冬の朝にお湯が出ない。どうしたものかと外に出て確認してみたところ、電熱線がコンセントからはずれているではありませんか。

建物の壁と塀の間に屋根の雪が落ち、その雪がコンセントと水道管の間でたわんでいたリード線を巻き込み、そのまま雪が固まっているのです。おそらく日が続つにつれて凍結した雪が地面へと沈んでいき、その力でコンセントから電熱線を引き抜いてしまったのでしょう。

偶然の営みには感心しますが、何とも情ない気持ちです。長靴に履き換え、我が身には狭すぎる壁と塀の間を、雪を踏み固めながら横歩きし、リード線を引き上げ、漏電しないようにプラグの先の氷をきれいに拭き取り、コンセントに差し戻す。時間にすれば三〇四分のことでしょうが、雪の深さや寒さにはやはり身構えてしまいます。

この日は時間に余裕があり、多少気温が上がってから差し戻しに行きましたので、それほど苦にもなりませんでしたが、マイナス5度以下の寒さなら、手がかじかんで作業もままなりません。雪が舞つていようものなら、うなじに雪が舞い込んできたりと、最低の気分になること請け合いです。忙しい朝ならきつと頭に血が上がってしまうに違いありません。もちろん電熱線を使用するに越したことはありませんが、結局は春にならなければ仕方がない、ということをお願い知ったのです。

水道に限らず、一事が万事がこの調子ですから、一人暮らしのお年寄

りやお体の弱い方のことを思うと、怪我や病気の一つもせずにはひと冬越そうというのは本当に大変なことだと思うのです。これ以上寒くならないように、これ以上雪が降らないように、どうか今日一日を無事に過ごせますように、明日の朝もまた無事に迎えることができますようにと、まさに祈るような気持ちで、春が来るのを待ちわびているのではないでしょう。

ところで数年前、あるお檀家さんに突然呼び出され、お昼をご馳走になりました。五十歳そこそこの料理屋のご主人で、お寺の若和尚を構いたくって仕方がない、そんなお付き合いを頂戴しておりました。

ご病気がかなり悪いとは聞き及んでおりましたが、その日はお酒も勧めていただきながら、近所の噂話から仏教の經典のことまでいろいろと話をしました。その中で、彼がいま病院に入院していること、数日後に手術を控えていること、その手術が料理人である彼の利き腕の動きを奪ってしまうこと、強引に外泊許可を取ってきていることなどを窺い知ることができました。病名についてもおよその察しがついていたようでしたが、それでいて「お酒のご相伴にあずかりたい。飲み交わそう」というのです。肝臓が悪いのですから、いくらなんでも飲ませるわけには参

りません。何本かの徳利を私一人で必死に飲み干し帰ろうとすると、彼は「ともかく今日のお布施を出す」と言い出したのです。

私が「お昼をご馳走になってそれでもう充分なお布施だし、お経も読んでいないのだから、これ以上頂戴するわけにはいかない」と言い、そこでまた少しやりとりがあつて「それじゃ、今日はせっかく般若心経の話になったのだから、毎朝一卷ずつお唱えして、あなたの病気が全快するまでお祈りします」と約束をしてお布施を頂戴したのでした。

それから約二年、ご主人がお浄土に逝かれるまで、私は約束の般若心経をお唱えするしか励ます術を知りませんでした。「お寺で葬式をあげてもらいたい」というのが生前の希望でしたが「細かいことはすべて菩提寺にお任せしてある」と言い遣されたそうです。逆に慰められました。

法然上人は、死後の往生極楽を願うことはお念仏に限るけれども、まだまだいききたい、よりよく過ごしたいと「この世」の幸福を祈るには、もちろんお念仏でよいのだけれども、それ以外の方法で神仏に祈り捧げてても何ら不都合はない。それで念仏往生が妨げられるというわけではない、とおっしゃっています。

水道が凍結しないようにいろいろ工夫して、その結果、少しでも快適

な冬を過ごすことができるなら、大いにそれは結構なことです。しかし、凍結するからといって、冬の間だけ暖かな所に引越そうなどという人はそうはおりますまい。春を心待ちにしていれば、それでいいのです。

同じように、重い病気に罹った人が、その身心を少しでも快適に過ごせるよう、いろいろ工夫してみることは大切なことです。「この世のいのり」に般若心経をお唱えしようと約束してみることもあるのです。しかし不死の妙薬などこの世のどこを捜してもありません。不治の病と受け止めたならば、冬の後には必ず春がくるさと、ただ死後の極楽往生を信じ、後はお任せして生きてみたいものです。

料理屋のご主人の三回忌はどうに過ぎましたが、私のまわりで、病氣や怪我で「冬を堪え忍び、春を待ちわびる」ような思いで日々を過ごしている人は今も少なくありません。朝のお勤めの後、般若心経・祈願文・お十念と続ける「この世のいのり」は続けています。あのご主人との約束が無力な私の心を慰め往生の妨げではないとの上人のお言葉が私の励みとなっているのですから。

FORUM

仏教カウンセリングの現在

平成10年3月11日(水)午後1時～4時40分

港区芝公園 増上寺三縁ホール

(最寄り駅：三田線芝公園)

参加費 1,000円 (当日券あり)

癒

しの時代とばかりに、各教団でも先駆的な取り組みが始まっています。

激しく変化する時代の中で、新たに生じる苦から人間を解き放つ、真の「抜苦与楽」実現のために、仏教カウンセリングは確かに、仏教再生の方途として、貴重な可能性を秘めているといえましょう。

カウンセリングを実践する僧侶は、一様にそれを通じて「自分が学ばされた」と語ります。カウンセリングとはむしろ対話であり、共感的な人間関係の上に成り立つもののなのです。

仏教者がカウンセリングを積極的に実践することは、仏教を自己満足やマンネリの域に閉じ込めず、進んで自己を開く、人と係わる援助的な人間関係を築き上げていくということなのです。

それは、現代を生きる仏教者である私たちが、あらゆる縁起の中で、より仏教的な自覚を深めていくということではないでしょうか。

《プログラム》

第1部 プレゼンテーション

「仏教とカウンセリングをつなぐもの」

第2部 ビジュアルレポート

「仏教カウンセリングの現在」

南無道場 (日蓮宗・妙厳寺)

内観研修所 (真言律宗・蓮華院誕生寺)

校正カウンセリング研究所

こころの教室 (浄土宗・應典院)

こころの相談室 (浄土真宗・浄栄寺)

第3部 レクチャー

「現在家族とカウンセリング」

大正大学カウンセリング研究所所長 村瀬嘉代子先生

第4部 シンポジウム

「仏教カウンセリングの課題」

真宗カウンセリング研究所

西光 義敏先生

仏教情報センター事務局長

草野 栄應先生

大正大学カウンセリング研究所所長 村瀬嘉代子先生

司会 佐藤 隆一先生

【問い合わせ先】

浄土宗東京教区青年会 03-3437-4538

教化情報センター21の会 06-771-7641

主催 浄土宗東京教区教化団 浄土宗東京教区青年会 教化情報センター21の会

後援 全日本仏教会 全日本仏教青年会 全国浄土宗青年会 新日本宗教連合青年会
浄土宗総合研究所

協力 浄土宗大本山増上寺

利根川裕のホットアングル

(最終回)

長野オリンピックの メッセージ

利根川
裕

長野の冬季オリンピックの開会式をテレビで見た。

これが、すばらしい開会式であった。オリンピックの開会式とは何かを、あらためて考えさせる思想性を持っていた。きつと今後、夏季冬季を問わず、オリンピックを開催する当事者にとっては、今回の開会式は数多くの示唆を与えたものとして、語り草になるであろう。それくらいの意味深さをもった開会式であった。

オリンピックは、夏季であれ冬季であれ、開催されるにつれ、競技種目がふえ、参加国がふえ、参加選手数がふえてゆく。

正直のところ、こんな競技種目はなくてもいいじゃないか、と文句をつけたい点もないではないし、ひたすら規模が大きくなっていくのも、もはやいき過ぎの感もないではない。しかし、この傾向は今後もとどまらないであろう。ますます拡大化してゆくにちがいない。

そうなる理由はふたつある。ひとつは、民族独立による新興国。ないし新興組織体がふえていくからである。そして、もうひとつは、今やこのスポーツイベントはテレビというマスメディアによって全世界の数十億の人たちの享受するイベントとなったからである。

今回もサマランチ会長はその挨拶で、スポーツ開催団体の名とともに、あえてマスメディアについて一言ふれていた。

四年に一度（あるいは夏季、冬季があるから二年に一度）、全世界の数十億の人々が享受する大イベントがオリンピックである。

さて、こうなると、その開会式にどんなメッセージを盛りこむかが、たいへん重要な意味をもってくる。そして今回の長野では、じつに明解なメッセージ性が貫かれていた。

そのメッセージとは何か。平和への意思表示である。オリンピックが「平和の祭典」である、というのは、いわば誰もが知っているお題目だが、そのお題目をたんなるセレモニ



ーと化すことなく、はつきりとした表情を与えたところに、今回の開会式の値打ちがある。新聞の伝えるところによると、開会式の総合プロデューサーの浅利慶太さんは、海外の記者たちに、

「日本は二十世紀の戦争に責任がある。だからこそ二十一世紀は平和にと願うのです」と語った。

そういう意図が、全世界の数十億の人たちにはつきりと伝わった開会式であった。

テレビを御覧になった人たちは先刻ご承知だから詳細は省くとして、聖火を掲げて開会式場へと走りこんできたのがクリス・ムーンスン。クリスさんは対人地雷の撤去法を指導中、手足を吹き飛ばされた人である。右手、右足が義手、義足。その人が聖火を会場へと運んでくる。そして会場では、この人は数百人の子供たちの輪にとり囲まれ、子供たちと一緒に走りすすむ。その子供たちの中には視覚障害の子たちもいる。クリス・ムーンスンさん



「誠実」日本を目指す
和顔愛語の
和顔堂

◆ 営業品目 ◆

寺院専用各種記念品・慶弔用品
御布施用品・お供物品
その他寺院用品全般
結婚式引き出物・香典返し用品
企業及び商店PR用品
販売促進品・ギフト用品全般
名入れ・包装・のし掛け

〒153-0064 東京都目黒区下目黒3-14-14
株式会社 **和顔堂**
みなみ供養が一番
TEL 03-3794-1100 (代)
FAX 03-3794-1107
〒01201767600 ナムナム札

も子供たちも、みんな楽しげな輪となって手を振っている。

これを政治的プロパガンダふうにしたたり、人類的センシメンタリズムふうにしたたり、という演出をつとめて抑えているところに、強い説得力があった。

きつとこのメッセージは、世界の数十億の人たちの気持ちのどこかに伝わったことであらう。

ところで、この日のニュースで、橋本首相がクリントン大統領あてに、長野オリンピック開催中はイラクへの武力介入を控えてほし

い、という親書を送ったことが伝えられた。現実政治の上では、こういう親書をだすことを必要とするほどの国際的危機が存在していることも事実である。

しかし、だからこそ、長野オリンピック開会式のメッセージは意味深いのである。

それはさておき、今回の開会式に対して、一部では、地味だったという声がある、とか聞いた。

わたしは、地味だったとは思っていない。また、あれを地味というなら、地味で結構ではないか、とも思っている。

じつは、夏冬問わず、オリンピックの開会式がいやがうえにも派手派手しくショウアップされる傾向があるのを、わたしはひそかにニガニガしく思っていたのである。

しかも、そのショウアップが商業主義と手を結んだりしているのを見るのは、決して気持ちのいいものではなかった。世界の数十億の人が見るイベントというのは、またとない広告媒体である。だからコマースヤリズムが手ぐすねひいて割りこもうとするが、そういう商業的ショウアップのなかったのは、今回の開会式で大いに評価していいことではないか。

また、ことさらマスメガムの集团的デモンストレーションをとりいれなかったのも、わが意に叶っていた。

そういえば、お相撲さんと子どもの先導による各国選手団入場というのも、じつにはほえましかった。見ているほうの心も和むのである。お相撲さんの持っているこういうキャ

ラクターはまことに貴重であることを、こんどあらためて承知した次第であった。

そして、最後に世界の五か所をつないでのベートーヴェンの第九交響曲の「歓喜の歌」の大合唱があったが、これが圧巻。

マスメディアが世界をつないでいることを実記した企画であった。これでこそ、今世紀の最大の武器を活用した世界的イベントになった。

クリントン氏やフセイン氏ははたしてこの世界的イベントを見たであろうか。見て何かを感じてくれたであろうか。開会式のメッセー지를ぜひ受けとめてもらいたいものである。

(作家)

健康ブームと言われるようになって、もうずいぶんになる。

スポーツ、食べ物、薬等々、健康になるためのメニューが世には溢れ、人びとは何かに追われるように健康になるための何かをしている。

先日、友人が亡くなった。四十七歳だった。少々太り気味で、勤め先の検診のときに、「このままの生活を続けていたら十年後には、確実に糖尿病になりそうですよ。何かスポーツをしたらどうですか」と医師に言われたと

いう。そして、その忠告に従い、仕事の帰りにスポーツジムに通いはじめた矢先の心筋梗塞だった。

通夜の後、友人たちで話し合った。

「医師の言うことを聞かなかつたら、糖尿病になったかも知れないが、少なくともあと十年は生きたのに、健康になろうなんて気を起こしたから、あのバカは……」

急に運動をした結果であることはだれもが分かっていたが、

③ なんか 変だな

健康でいなければいけない

でも、この意見がみんなを一番納得させた。

たしかに、健康で長生きは、生きる人びとの願いであろう。身体のおちこちが痛んだり、また入院、手術などは辛い。寝たきりの老後もみじめだ。それをも思つての健康思考なのだろうが、でも、いまのブームを見ていると、人びとは、「健康でいなければいけない」という強迫観念にしばられた精神の病に取りつかれているように思えてならないのだが……。

(順)

京都一千年の歴史に

育まれた巧みの技

京仏壇・佛具は当店に!!

(株)島津法衣佛具店

〒075-3141 七六八
FAX 075-3151-3753

〒615 京都市右京区
西京極郡町一〇三番地三

大室了皓師が答える 読者からの仏教相談

世の中苦ばかり。
この苦を仏教では
どう説いているのでしょうか。



毎月楽しみに読まさせていたでいております。

ここ数年、体の自由もだんだんときかなくなり仕事も辞め、家の中に居る時間が増え、外にでるのも病院に通院する時ぐらいになりました。

孫に小遣いをやつたりするのもささやかな楽しみでしたが、近県に暮らす息子も景気が悪くなつてからというもの、なかなか訪ねてくれません。

老妻と二人年金で細々と暮らしておりますが、医療費も嵩みこの上どちらか入院する事でもなれば大変こころもとなひ次第です。今や数少ない楽しみのテレビやラジオもすさんだ話題が多く、この先、生きて行くのも心配だらけです。

私、こゝろが苦しいなどというのは世間さまに申し訳なく思いますが、人間はこの年になつても苦しみからは逃げられないものでしょうか。



仏教では三界皆苦と言い、この世は苦しい事で一杯だ、としてその苦を次のようにあげています。

先ず四苦とは、

一、生まれる苦しみ。

二、老いる苦しみ。

三、病にかかる苦しみ。

四、死ぬ苦しみ。

この四苦に、次の四つの苦を加えて、四苦八苦と言います。

一、親しい人ともやがて、別れなければならない苦しみ。

二、怨み憎んでいる人とも会わなければならない苦しみ。

三、欲しいものが、思うままに手に入らない苦しみ。

四、欲望の高まりを抑え切れない苦しみ。

この四苦八苦が転じて、この世は非常に苦しい所だ、またこの世では散々に苦勞させられるものだ、ということになりました。

さて、この世のことを娑婆と言いますね。

なぜ娑婆というかと申しますと、インドの言葉の「サーハ」が中国で訳すのに適当な言葉が無いので、そのまま音を取って、「娑婆」の字を当てました。

では「サーハ」とは、何かといいますと、もとは「忍土」という意味なのです。

つまりこの世は、忍んで渡る所、苦しみに耐えて暮らす所、もし耐え忍ぶことが出来なければ生きていけない所なのです。

そして「苦」とは思うようにならないことを意味しますから、この世は思うようにはならない所ということにもなります。

思うようにならないから苦勞するのです。

さてここで私は考えます。

この世が思うようになつたならば、「苦」はなくなつて幸せに暮らせるようになるでしょう。うか。

先の四苦八苦の幾つかを裏返して見ましよう。

老いていくことがなく、何時までも若いままにいたしたら、子や孫はどうなるのでしょうか。立派な大人に成長することが出来るでしょうか。

子の成長を願わない人はいません。そのためには、順に年を重ねねばなりません、老いなければならぬのです。

また、昔の中国に不老長寿の薬を求めた人がいましたが、他の親しい人や若い人たちがどんどん先に死んでいつて、自分だけが何時までも生きていたら、きっと皆と同じように順に死にたいと願うようになるでしょう。

九十歳も過ぎた人がいて、私にお願いと言いました。

「早くお迎えがありますように、押込んで下さい」と。

欲しいものがあるように手に入らないという苦しみが有りますが、もし自由に手に入ったら、どうなるでしょうか。

お金や名誉も思うまま、となったら努力し

て働く必要はありません。必要なお金を手にしたいから、汗を流して頑張りますが、その必要がなくなったらどうなるでしょうか。働く意欲がなくなり、生きる励みもなくなりま

す。

そういう人生をどう思いますか。

人間の欲望には限りがありません。欲しいものが欲しいように手に入り、何でも思うように取り運ぶことができたなら、恐らくこの世は地獄になるのではないのでしょうか。

仏様はそれを望んではおられない筈です。ですから、お経に「人生苦は如来の大悲なり」と説かれているのだと思います。

つまり四苦八苦は、仏が大きな慈悲の心から、私たちに与えて下さっているのです。

そして耐え忍んで渡れるために、様々の教えが説かれています。

浄土宗の念仏の教えも、そのことを説くものです。どうぞお念仏によって苦しい世を、力強く生きて下さるようお願いしています。

うまい野菜と



料理の話

あるいは

セ
ッ
ツ
エ
ー
バ
タ
ケ

自家菜園の

ひそかな

愉しみ

とりあえず最終回

我田大

ブロッコリーをうまいと思って食ったことがなかった。

みなさん、うまいと思って食べたことがありますか。その緑色や、つぶつぶのツボミの集合から、いかにも栄養というものがびっしり詰まっているような気持ちになって、ま、いわばブロッコリー大明神への信仰の発露で、食べているのではないですか。世間の人もみんな食べているようだし、分析によれば栄養価も高いというし、そういう流れに逆らってはいけない、遅れないようにしなければ、と食べているのではないですか。

いや、科学機器で測定した栄養の数字がどうかなんて私は知りません。おそらく高いのでしょう。測られた栄養がすべて吸収されるかどうかとも知らないし、いま食べているこれらの成分がどうとも知りません。

が、食っちゃうまくなー、という感じが食うたびにします。ソースの味でくっついてるだけ。そのもののうまみというものがない、と。売ってるのがうまくないのは、しょうが

ないというかあたりまえですが、自分でつくって「お湯を火にかけてからとりに行き」茹でたのまでが、うまくないのは口惜しい。アスパラを見よ、トウモロコシを見よ、エダマメを見よ。市販品とは天と地ほどの違いがあるじゃないか。ブロッコリーはどうして、あじやないのか。もたらさういう味のなものなのか。苦勞して品種改良し、わざわざまずいのを作るとは考えにくい、とくにうまくなくても、まずくはないからいいのか。日持ちするからいいのか。買った野菜を食っている人が大多数のシヤバだから、それていいのか。ま、そのへん、詳しい事情はよくわからない。

でも、ブロッコリーやその仲間のキャベツの一派は、外見を人間によって好きなように「改良」されたとはいえる。本人(?)にその要素があつたのかもしれないが。ことばは悪いが奇形化。それを奇形とも思わず喜んで食っているのが人間だ。奇形植物を野菜と言ひ換え、そして野菜は健康にいいとかいいな

がら。私も人類のはしくれとして奇形一通りは作って食ってみました。

青汁などに使う結球しないケールやコラーズの仲間が原種に近いといわれます。

結球するのがキャベツ。これも形が平べったいの、丸いの尖ったの、葉が柔らかいのかたいの、縮緬状の、色が赤紫の、いろいろなワキ芽が結球する子持甘藍（かんらん）別名芽キャベツもある。不結球種もあるという。

（七月に種を蒔き、定植したのを放任しておいたら、今年は正月過ぎまでまったく雪がなかったで、かなりの芽キャベツを収穫することができた。霜が降りる頃には、下葉をかかないでおいした芽キャベツが畑に立っている姿は、葉っぱがマントを着たようになった。芽キャベツを暖かい空間に守るようだった。どこかで見た草姿と思ったらヒマラヤの「温室植物」と呼ばれるものとよく似ていた）

花蕾が奇形化したのが花椰菜ことカリフラワー。白、クリーム、紫と色もいろいろ。サンゴシヨウというさらに奇形の種類もある。

花蕾の巨大化したのがブロッコリー。頂花蕾専用種（一つで終わり）と側枝花蕾も収穫できるのがある。側枝花蕾ばかりというような種類もある。

中国野菜にはカイラン（芥藍）というトウナのようなキャベツの仲間がある。

茎が蕪状になったのがコールラビ。またの名を蕪甘藍。紫色のものもある。

食用にしないハボタンも。

とこういうキャベツ奇形集団の一つがブロッコリーなのだ。うまくないといけないが、なぜ私はそれをつくっているか。食べているか。答えはかんたん、需要があるからだ。

子どもたちが好きで、ゆでたのをマヨネーズやら、それにケチャップをまぜたのをつけてはくばく食うのだ。親としては需要にたいしては供給せざるをえない。いつもあるように少しづつ三回ほど種を蒔いている。四月下旬、五月下旬、七月上旬くらいと。そうすると七月から雪が降る二月までブロッコリーを食べていられる。家庭菜園（セツツエー島）

での素人の野菜づくりだから、収穫期がそろ
う商品用の品種は、一度にとれてかえって困
る。側枝花蕾も収穫できる品種を植えている。

キャベツも同じように年三回種を蒔いてい
るのですが、青虫のつき方がぜんぜん違うの
が面白い。もちろんキャベツのほうに沢山つ
く。うまいからだろう。ブロッコリーの葉は
食用じゃないし。また開いているし、虫と葉
の色が違って、虫が目立ってとりやすい。苗
が小さい時はキャベツもブロッコリーも同じ
ような青緑白色ですが、大きくなるとキャベ
ツの葉は青虫とはほとんど同じ緑色になるし、
巻いてきてとりにくい。農薬を撒かない私は
手で虫をとるのですが、全部をとりきれない
で困る。全部とつたつもりでも、メノコシし
ていても一回同じところを歩くとまた見つ
かる、きりがいい。

青虫もブロッコリーを、より好まないのは、
食味について私と同意見なのだろうか。まあ
食うのは蕾じゃない葉ですけど。

そのブロッコリーはなんといつても蕾です

から茎葉が十分育ったところで出てきます。
指の先ほどの小さいのがだんだん大きくなつ
て、アノ大きさになり、しばらくするとこん
どは小さな多くの蕾が開きかけてくる。ここ
のプロセスは結構時間がかかりますが、その
どの段階でとるか、なかなか見極めにくい。
まあ自家菜園ではいつともいいのですが、
なるべく大きくして蕾の開かないうちに、と
は思っている。しかし、ついているわけにも
いかないし、結局、食べる都合で、いいかげ
ん適当にとることになってしまう。

それでもう一つ迷うことがある。茎の先に
蕾がついているブロッコリー、それをどこか
ら切るか。商品用なら日本のことだ、おそら
く全長何センチと決められているのだろう。
しかし自分には基準がない。自由に切って
いい。と、いっても上下たつた五センチくら
いの自由なのだが。切るあたりにいくつかあ
る脇芽がのびてそれなりのブロッコリーにな
るからもつたない、とか考え始めると、そ
こが決められない。包丁がためらう。首切り

でもあるまいし。どこでも大差ないのに、いざ切るとなると、なんだか。

ミセヤに行つてあるのを買うだけの商品プロッコリーなら、この二つの逡巡というか優柔不断とは無縁でいられるのに。それがどうだというのじゃないですが、家庭菜園の楽しみというわけでもないですが、迷う。

えーと、私のプロッコリー作りのなかでは立派なのがとれるのは夏蒔き秋とりです。これはキャベツもそうです。旬というものでしょう。寒くなるとしぜんと虫がいなくなり、キャベツはうまくなってくるのに、プロッコリーはさほどじやないのが不思議だ、と話がやつと戻ってきた。

ある時、私が家でプロッコリーを茹でる役目をおおせつかった。なぜか。食卓のを「茹で過ぎ」と意見を述べたからだ。「じゃあ、自分でシれば」と、幸いウデはある。「やりますよ」菜っ葉と違って堅いプロッコリーはイゼ（茹で）加減の見きわめが難しい。湯を多目にわかし、とってきて一口大に分断した

プロッコリーを投入する。おっと待った、茎もあつた。皮は剥くと身がついてもつたないのて、包丁でひつけてビリリと剥ぎ、四つ割りにして投入。青緑白色が鮮緑色に変化する。美しい。しばし待つ。柄をちよいとつまんで加減を見る。指先の感覚（いい）。冷水にさらす。冷めればざるに上げる。

ここんと自家産の茹だりの早いこと、驚くばかりです。買ってきたのは何分イゼでもかたいのに、自分ちのは、すぐイゼすぎになつてしまふ。ちようどいいと思つてから水にとつたのでは手遅れ。その経過時間まで読んだ作業が必要とされます。

そして調理人のヨロクで、ちよつと試食。目についた翡翠色の茎をパク。と、え、ん？ あまい、よ。なに、もう一本。やはり、あまい。薔じやなくてこだったか。このー。この小発見を言いふらし試食させても家人はまあ、おおむね冷たい反応。私の長年のプロッコリー疑惑が晴らされたというのに。シヤバはこれだ、いつもながら。

FORUM
浄土の広場

「浄土の広場」では

読者の自由な参加をお待ちしています。

詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、

TVウォッチング、紀行文、その他創作等。

あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。

どしどし編集部にお寄せ下さい。

前田流平家琵琶

橋本敏江

（へいけほんぶし）

平家本節による

平家物語 通し上演



東京・貞源寺 藤本芳清

当寺では年間二、三度の割合で古典芸能を中心とした演奏会などを行っておりますが、昨年、縁あって前田流平家琵琶の橋本敏江さんの演奏会を開かせていただきました。

一回目の四月十九日は、「祇園精舎」と「殿上闇討」、二回目の六月八日は「新大納言被流」と「徳大寺殿島詣」で、ゲストに宮内庁楽部の岩波滋さんをお招きして、和琴の弾き語りで催馬楽「伊勢海」を演奏していただきました。

能役者や日本舞踊、江戸友禅の絵師、あるいは大学の文学部教授等もいらして、芸能としても文学としても、琵琶語りによる平家物語が、日本の芸能や文学の上で重要なものであることを改めて知らされました。

レコード店で偶々CDを購入したことがきっかけで、レコード会社に問い合わせたところ、緒先を教えていただき、講演を依頼したことから橋本先生とのお付き合いが始まったのですが、あたかもそれが必然であったかのようない出来事を何度も経験させられました。

橋本先生のCDを制作したのが当寺の檀信

徒であつたり、先生の一弦琴の師匠がその方の親友だつたり、先生が楽琵琶を教わつたのが、昨年まで増上寺雅楽会で龍笛を教えていた下さつた上近正先生だつたり。そのすべてをここでご紹介できないほどに多くの奇妙な繋がりや何度も経験いたしましたし、それは、これからも続くような気がしております。

話の成り行きから、先生が念願とされておられた平家物語「巻の一」から「灌頂の巻」までの全二百回通し上演を、私が主催することになり、都内御寺院のご協力を得て今年から始めさせていただくことになりましたが、予めそのように決められていたようにも思うのです。

ご存じの通り平家物語は、天承二年（一一三二）に平忠盛が昇殿を許されるところから始まります。その翌年に法然上人がお生まれになります。そして平家一門最後の一人、建礼門院徳子が出家し大原に隠棲して平家一門の後生安樂を願つて念仏三昧の日々を送り、西に紫雲たなびき音楽空に聞こえるという奇瑞を得て往生を遂げたのが、法然上人御入滅

の翌年、建暦二年六月十九日です。

平家を亡ぼした後白河法皇やその子、平徳子（建礼門院）の夫、高倉天皇が法然上人より御受戒されたことは、勅修御傳にも記載されています。蓮生房熊谷直実の琴、平重衡の事等々。また、上人は平家物語巻の十「戒文」に登場されて、重衡に浄土往生の途を説かれますが、人を導く役割として平家物語に登場する僧侶は法然上人だけです。

琵琶語りによる平家物語全、二百句通し上演の場として、その内容から考えるに、浄土宗寺院はどこまでもいい場所ではないでしょう。

橋本先生はクリスチャンですが、やはり平家を語る場として浄土宗寺院がもっともふさわしいと考えておられます。ところが不思議なことに、今まで何度も寺や神社で演奏をされているのに、浄土宗寺院とは一度も縁がなかったそうです。

ご自身の演奏活動の集大成として、還暦の歳に全二百句通し上演を始められる。そのときに初めて浄土宗寺院との縁がてきえる。偶然というにはあまりにも出来過ぎています。

一年一巻のペースで進めて参りますので、語り終えるのは十二年後のこと。

もしこの縁が予め予定されていたものであるならば、その十二年に何が起るのか、或いは、どのような結果が待っているのか。見届けてみたいと思います。

第一回目は、三月十四日、増上寺の景光殿で増上寺式師会僧侶の法要の後に上演いたします。

この平家琵琶語りによる二百句通し上演に関心をお持ちの方は、左記へご連絡下さい。

○三（三三八五）八八六五

貞源寺内・平家琵琶鑑賞会。藤木芳清

巻の一（章題は寛一本による）

●三月十四日（土曜日）

於一芝・浄土宗大本山増上寺 午後四時開場 五時開演

「祇園精舎」「殿上蘭討」

法要 大本山増上寺式師会僧侶

鼓奉納 能囃子方・大倉正之助師

●四月五日（日曜日）

於一 中野・貞源寺 午後三時開場 四時開演

「鱈」「亮」「吾身榮華」

江戸小唄 勇希波つ帆師匠

●五月十日（日曜日）

於一 笹塚・清岸寺 午後三時開場 四時開演

「祇王」

尺八奉納 清岸寺住職・原口正弘上人

能舞囃子 観世流シテ方・津村禮次郎師

●九月二十六日（土曜日）

於一 目黒・戒法寺 午後四時開場 五時開演

「二代后」「額打論」「清水寺炎上」

●十月三十一日（土曜日）

於一 芝・観智院 午後四時開場 五時開演

「東宮立」「殿下集合」「鹿谷」「俊寛少汰」「鶴川軍」

尺八奉納 観智院福住職・土屋正道上人

●十一月二十八日（土曜日）

於一 清澄・本誓寺 午後四時開場 五時開演

「願立」「御奥振」「内裏炎上」

前売 3500円（平家琵琶鑑賞会会員）

当日 4000円 一般は当日のみとなります

誌上俳壇

東京の雪積む列車発ちにけり
切り花のかたき薔や冴えかへる

内堀綾子（小金井市）

笹鳴や駈けおりてくる六年生
波打てる廊を曲がるちゃんちゃんこ

松本厚子（町田市）

深雪晴踏み絵踏むかに身構へて
悠然と雲に余生のみち拓く

宇高一慧（上尾市）

白寿なる翁にまみゆ大旦
滾々と笈の水も寒に入る

佐藤雅子（上山市）

時雨られてきつきの下より這ひ出しぬ
病院の売店閑ざす深き冬

山本美代子（姫路市）

風邪の目を瞑れば母の笑ひをり
風邪に臥す家中の音ききわけて

吉田ゆきゑ（江戸川区）

白鳥の同行二人水尾曳けり
白無垢の白鳥ばかりとはいへず

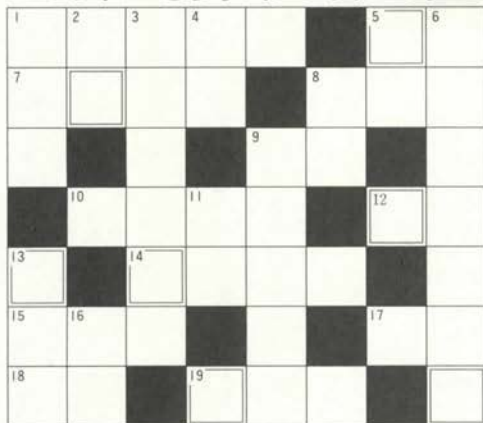
児玉仁良（入間市）

●「J」ばずる

1月号の答えは『アラマキジャケ』でした。応募総数101通のなかから栄えある当選者は次の方々です。
(敬称略) 宮城・豊嶋淑子、青森・菊池愛、埼玉・横井隆行、千葉・吉岡みどり、東京・伊藤明。おめでとうございます。

答えがわかったら、「J」ばずる係までふるってご応募下さい。抽選で五名の方に記念品を差し上げます。三月末日必着で。

★ヒント・もうすぐシーズンです★



〈タテのカギ〉

- ①昭和歌謡の女王
- ②インドカレーにつくパン
- ③珍しい動植物が発見された、インド洋にある島
- ④〇〇善興行
- ⑤危険な動物はこの中に
- ⑥卒業の思い出に親友とバチリ
- ⑧バクが食べるもの
- ⑨料理のとりみづけに利用されるもの
- ⑪お母さんのこと
- ⑬奈良県の旧国名
- ⑭芝生を〇〇
- ⑯鯨を捕獲する道具

〈ヨコのカギ〉

- ①3月3日は何の日
- ⑤鯨のえさ〇〇アミ
- ⑦風呂屋の入り口にある高い台
- ⑧花は観賞用に栽培され、根は食用になる
- ⑨浦島太郎は〇〇を助けた
- ⑩江戸時代の捕り物道具
- ⑫アメリカ航空宇宙センターの略称
- ⑭源頼朝が開いた幕府
- ⑮校則を〇〇〇
- ⑰読者の〇〇を聞く
- ⑱12支の第10番目
- ⑲お相撲さんの名前



編集

後記

半金色^{（長）}拌みま^{（長）}つる善導忌

岱潤

歳時記をながめていると、〇〇忌という季語がたくさん出てくる。俳人の忌日が多い中、さすがは法然上人、現代歳時記にも『御忌』としてちゃんと入っている。しかし、『善導忌』は見つからない。

三月十四日は、善導大師が六十九歳にて忽然とお浄土に往生された記念すべき日である。それなのに、『善導忌』が季語にないのはおかしいと思い、数冊歳時記をめくっていたら、古いものにはちゃんと載っていたので嬉しくなった。

今年は『選訳集奉戴八百年』の年である。この年の祝い方として、法然上人なら何をしてみたら嬉しいだろうかなどと不遜にも考えてみた。

卑近な例として、教師が教え子から自分自身を崇めてお祝いしてくれることよりも、教師自身が尊敬している人を、教え子達が崇める集いをしてくれることが嬉しいのではないだろうか。その方が自分の考えが分かってくれたことの証明であり、教師としての喜びがあるのではないだろうかと考えた。

それならば、我々は善導大師を讃えることをもつとすべきではないだろうかと思えてきたのである。法然上人が如来のように尊敬尽くした善導大師に対して、我々はいささか腰が引けているように思われる。せめて三月十四日の『善導忌』くらい、各末寺でもしっかりお参りしたいと思う。法然上人が喜んでくれることは何だろうか、法然上人が現代にいたら、現代人にいったい何を言うだろうかと考えている今日この頃である。（長）

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川岱潤

斎藤見道

村田洋一

石上俊教

佐山哲郎

編集顧問

大室了晴

浄土

六十四巻三月号 頒価六百元
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可
印刷 平成十年二月二十五日
発行 平成十年三月一日

発行人 真野龍海

編集人 宮林昭彦

印刷所 株式会社 シー・ティー・イー

〒一〇五・〇〇一一

東京都港区芝公園四一七四明照会館内

発行所 法然上人鑑仰会

電話 〇三三・五七八・六九四七

FAX 〇三三・五七八・七〇三六

振替 〇〇一八〇八八二一八七



これが、
ビヤホールの喉ごし。



ビヤホールの喉ごし

サッポロ生
黒ラベル



ビールは、20歳になってから。あきかんはリサイクルへ。③

●ご協力のお蔭に自動販売機による酒類の販売は午後1時から午前5時まで停止されています。

サッポロビール株式会社